

目覚め

水口 道子

(一)

「大バアちゃん、生きとる？」

顔のすぐ近くでカン高い子供の声が聞こえて、カツは目を覚ました。

「心配しなくても生きてるよ。寝てるだけなの。」

ホラ、邪魔になるからこつちへおいで」

長女の峰子が答えているところをみると、今の声は峰子の孫の梨菜のようだ。

梨菜の愛くるしい顔が、カツの脳裏に浮かんだ。

んざりしながらも、カツは子供に無関心ではいられなかった。

嫌な所はあるにしても、子供の可愛さは無上のものだ。それは、非力な子供が生き延びるために神から与えられた摂理だろうか、と思いつつ、理屈抜きで、子供の可愛いさにカツはいつでも心が癒されるのを覚えたものだ。

カツはおしやまな梨菜が見たいと思った。ぶくぶくとしたその柔肌に触りたいと思った。だが、どうしたことか目が開かない。 瞼を動かそうと必死で意識を集 中して試みるのだが、ピクリともしない。手や足に至っては意識を集中することもできない。重いか怠いか痺れていると

カツは今年ちようど八十歳になった。三人の子供と七人の孫と八人の曾孫に恵まれている。

幼い子供とは好むと好まざるとに拘らず随分付き合った。だから、間違っても、幼子の心は染み一つ無く純真無垢だ、などとは思わない。

自分の思いを通すためなら手段を選ばぬわがま者もいたし、可愛さを武器に大人に媚びて思いを通そうとする子もいた。 妙に小利口に振る舞う子もいたし狡い子もいたし頑固者もいた。

三歳を過ぎると自我が芽生えだす。すなわち、子供といえどもしたたかに自分の人生を歩み始めるのだ、とカツは思い、三歳を過ぎた子の子守はどの子であれうんざりしたものだ。が、う

いうのではない。 体の感覚がまるでないのだ。頭だけが浮遊して存在しているような感じだ。

「体が目覚めるのには、もうちよつと時間がかかるとかな？」 梨菜を見たいという思いは抑え難いが、妙なことに、自分の身体が動かないということが、とほして気にならず、カツは冷静にそう思った。「気になるのよね、梨菜ちゃんは大バアちゃんが好きだから」次女の薫の声があった。 梨菜の頭でも撫でているのか少し間を置いて、

「でも、本当に、こんな状態がいつまでも続く困っちゃうのよね。 仕事してても落ち着かなくてさ」とつぶやくように言った。

「さっさと死ねってか？ 自分の親に」

姉と妹に挟まれた真中子で、跡取り息子の
信吾の気色ばんだ声でした。

嫁の文恵が慌てて、「お父さん！」と、小さな声
で信吾を嗜めるように言うのと、

「薫さんもお義姉さんもお忙しい体なのに、
私に裁量がないばかりに、事ある毎に呼び立
ててすみませんでした」と申し訳なさそうに言っ
て、「この五カ月は本当に心が落ち着かず、大変
だったと思います。でも、その甲斐あつて、意識
が無いながらもバアちゃんの内容は落ち着き、
退院することができました。後は追い追い、意識
を取り戻して元気になってくれると思います。
幸い、お医者さんは毎日でも往診に来てくれる

受け入れてくれる病院があるからそこに入れた
ら、と言ったんだけど、兄さんが連れて帰って来
たのよ。顔を見せろの声を聞かせるのと言われた
つて、私、できませんよ。自分の生活で手一杯な
んだから。母さんが悲しい思いや苦しい思いをし
てるというなら話は別だけど、こんな母さんじ
や来るだけ無駄なもの。私のことは当てにしない
でほしいわ」と言った。
「奇麗事は止めましょうよ、文恵さん。母さんは
良くなったから退院したんじゃないやなくて、これ
以上はいつまでいても良くならないから病院を
追い出されたのよ。だから、元気になつてもら
うなんて力まないで、適当に手を抜いて気楽に

というし、在宅看護の制度も利用できるよにな
つたので、日々のお世話は私等夫婦で何とか成
ると思います。お義姉さんと薫さんは、暇な時覗
きに来て下さればいいかと……」

文恵が言い終わるか終わらぬうちに、
「見に来て？」薫の声でした。
「バアちゃんにすればやつぱり、薫さんやお義姉
さんの声が聞けるのが一番嬉しいんじゃないか
と思うんです」

ちよつとろろたえ気味に文恵が言った。
「母さんは意識がないのよ。何があつても嬉しく
も辛くもないわよ」薫は苛立ったように言つて、
「私は、世話が掛かるから、寝たきりの病人を

世話してくれりやいいのよ。どうせ何も分からな
い植物と同じなんだから。

この際だからついでに言つときますけど、私等、
死に目にも絶対に会いたいと思つているわけで
はないから。会えるのに越したことはないけど、
何も分からない人に会つたつてどおつてことな
いから、こだわらないわ。今時の病人は薬でも
たせているから症状がよく分からなくつて、
絶対に会いたいなんて言つたら、世話するあんた
等は責任感じて大変でしょ。危篤だ危篤だと度々
呼ばれてはこつちも困るしね。
八十歳じや年に不足があるわけもなし、いつど
うなつても思い残すことなんてないわよ、本人だ

つて周りの人間だつて。ただ、事切れてからの連絡だけは、気をつけて、私と薫の所を一番にしてね。他人より後から駆けつけたんでは格好が付かないからさ」と、峰子が言った。

「ええ、分かりました」と、文恵が小さな声で答えている。

聞いていないことになっている会話を耳にするのは、何とも居心地の悪いものだ。悲しいとか腹が立つという思いよりも、自分の意識が戻ったことを早く伝え、娘にあるまじき口を慎まसानければ、と思う方が先だった。が、唼一つ動かないのだからすべがない。

「死に損なつたんだな、情け無い」とカツは思つてもいいなんて、直面してないから言うことだわ。育ててくれた親と永久に別れるのに、そんなでいいわけないもの」とでも思っていることだろう。

「兄さんと文恵義姉さんは、一昔前の人間みたいやね。植物状態で何も分からない母さんを、家のほうが居心地が良いだろう、と世話が大変なのにわざわざ連れて帰って来たり、死ぬ時は、何が何でも家族一同が枕元にはべつて見送るべきだと思つていたり」と薫が言うのと、

「今時奇特な人よね」と峰子が言つて、「私なんか、役目の終わった人間は、邪魔にならないように生きて、邪魔にならないように死ぬべきだ、と

だが、身体は本当にあの世にいつているのか、自分が死に直面しているということに関しては、七十歳の時に癌の告知をされた時のような衝撃はなかった。

どが悪うて入院したんかいな、と人事のよう
に思いを巡らせてみたが、さつぱり記憶がない。
こりや、脳卒中か心臓の発作で意識を失い、
五カ月も返らなんだんやな、とカツは大方の見当
をつけた。そして、信吾と文恵夫婦のことやから、
大仰にうるたえて、何度も峰子と薫を呼んだん
やな、と子供たちの遣り取りを聞きながら、思つ
た。

今も、文恵なら、腹の中で、「死に目に会わなくて
思つているんだからさ」九十を幾つか乗つた
姑のいる峰子は言った。その姑は、何年も
前に病院に放り込んだままで、言葉通り、峰子は
ほとんど見にも行かない。

「ともかく、よろしく頼むわ」
私等に造作が及ばないようにさえしてくれば、
煮て食うなど焼いて食うなどお好きなように、と
いうように言つて、娘たちはざわざわと部屋を出
て行つた。

部屋には誰もいなくなつた。それを、カツは、感覚
のない肌で感じた。
何を言っているのか言葉の綾までは分からない
が、愛らしい梨菜の声が段々遠のいていった。後

には、わずかに虫の音が聞こえるばかりだ。すると、突如、カツは親に捨てられた幼子のような孤独を感じた。果てしなく続く闇の中にただ一人立っているような、恐怖と絶望を抱き合わせたよ
うな凍て付く孤独感だった。

(以上8月19日放送分)